喜びのおとずれ

マルコによる福音書７章３１－３７節

森島　牧人　牧師

今日の説教題である「喜びのおとずれ」とは福音のことです。主イエスのおられるところには必ず「喜びのおとずれ」があり、絶望は希望に、苦しみは喜びに変えられ、勝利の知らせがもたらされるのです。

さて、今日の聖書には、その「福音」を確信出来る出来事が記されています。「それからまた、イエスはテイルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。」(マルコ７：３１）とそれは始まっています。聖書巻末の「新約時代のパレスチナ」という地図でも明らかなように、テイルス→シドン→デカポリス→ガリラヤ湖というこの道程は、ユダヤの中心地エルサレムから遠く離れた辺境の地を行くものでした。この異邦の地を行く長旅がどれほど主イエス一行を疲弊させるものであったか、容易に想像がつきますが、この道程こそが、メシアとして出発された主イエスご自身の中にあった、「異邦の地に福音を」との強い意志を証明するものとなっています。これによって如何なる者にも「神・主イエスとの出会い」が用意されることとなったのでした。

聖書は「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。」(同７：３２）と続きます。耳が聞こえず話せない・・・会話による交流を持てない彼は孤独だったことでしょう。加えて、当時そのような状態は悪霊によるものとされていたことから、彼は社会によってさらに厳しい孤独へと追いやられていたのです。このような閉ざされた状況の中を生きて来た彼に、この日、神・主イエスとの出会いの時がおとずれたのです。何人かの人を用いて、神は彼にその道を開かれたのでした。

「そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、・・・。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッファタ』と言われた。これは、『開け』という意味である。」(同７：３３－３４）と聖書は記します。主イエスは人々に連れて来られたその男だけを連れ出し、彼と一対一で向き合われます。この場面は、人間が主と向き合う時は必ず一対一であることを示しています。この時、主イエスが男に向かって言われたアラム語の「エッファタ」。男を閉ざされた世界から解放し、新しい世界へと導いたのはこの「エッファタ」という福音の言葉でした。閉ざされたところにいる・・・それはこの男だけではなく、「神の道から外れる」という罪の中にいる私たちもまた、真の言葉を聞き語っていないということで、男と同じということが言えます。そのような私たちも「エツファタ」という喜びの言葉をいただくために、主と一対一で向き合わなければならないのです。

３４節に「主は天を仰いで深く息をつき、」とあります。これは人間の運命を共に担おうとされるインマヌエルの神の執り成しの姿であり、十字架への道を歩むことを決意された人間イエスの姿でもあります。主によって癒された男が開口一番何を言ったか、聖書にはありませんが、彼は主イエスの名を呼び、「あなたは私たちの救い主＜イエス・キリスト＞です」と言ったのでしょう。それはまさに、福音に出会った時の私たちの言葉である「信仰の告白」という「教会に於ける唯一の言葉」であったに違いありません。常に私たちが聴くのは福音であり、口にするのは信仰の告白であることを憶えて、神を賛美する言葉の中にこの一週間を過ごしたいと思います。